

態度は、儒教においても仏教同様に忌避する傾向があるが、「書籍」という括りでは、一の巻の「古記典等総論」「書紀の論ひ」「直毘靈」などで、繰り返し書籍の伝来について言及し、この伝来が「漢意」を日本に瀾漫させる発端となったことを指摘している。よく知られた意・事・言の関係式において、「すべて意も事も、言を以て伝るものなれば、書はその記せる言辞ぞ主には有ける」(『古記典等総論』)と、とりわけ「言」に力点を置く宣長にとって、「言」を記した書籍は、その内容を議論する以前に、媒体として重要な働きをするものであった。そのことから『論語』と『千字文』の伝来は、単に漢文が伝わったということではなく、その漢文には必ず漢意が伴うことで、漢意の伝来をも意味するものであったと考えることができる。

しかし、宣長のこうした発想法によって、『論語』の内容の言及が不要と考えられたのか、あるいは、やはり言及そのものを忌避したのかという点についての疑問は残る。宣長は、儒仏に汚染されていない「古道」の姿を伝える書物である『古事記』から数少ない儒仏の要素すら徹底して排除しようとしたと私は考えているが、そのことは、太安万侶の序に対する注釈で、撰者である安万侶には本文から「陰陽乾坤」などの漢意的な用語を排除する意思があったと宣長が指摘していることから、それは認められるのではないだろうか。

平田篤胤の『黄帝伝記』について

——神道と道教との関連で——

坂出 祥伸

平田篤胤は秋田から上京した翌年、文政七年に『黄帝伝記』三巻を著わしたが、これを始めとして爾後中国、特に道教に関する著作を立て続けに著わしている。これらはいずれも内容的に相関連した著作と思われるが、今は『黄帝伝記』を取り上げて考察したい。

黄帝というのは司馬遷『史記』の巻頭「五帝本紀」の最初に置かれる伝説上の人物であるが、篤胤が綴る黄帝の伝記は、これにもとづいているのではない。明末・崇禎十三年に刊行された薛大訓纂輯『神仙通鑑』六十巻の巻一「軒轅黄帝」、巻三「廣黄帝本行記」の記述にほとんどとづき、両者を組み合わせて構成記述されていて、『史記』「五帝本紀」の黄帝紀でいくらか補っている。ところで、不可解なことに、『黄帝伝記』の書名が、門人記『菅能屋先生著述書目』など三種の書目のいずれにも載せられていないのである。にもかかわらず、『大壑君御一代略記』文政七年(一八二四)の項には「黄帝伝記稿成」と記されている。

篤胤の描く黄帝の伝記

先ず巻上の冒頭では、「黄帝なる者は、姓は公孫、有熊罔君の少典の次子なり。その母を附宝と名く、大電光の北斗枢星を繞て郊野に照すを見て感じて娠有り。二十四月にして黄帝を壽丘に生む、軒轅と号す」と述べて、神秘的な感生帝伝説で始められている。続いて、強暴で黄帝に従わない蚩尤氏、ついで諸

侯を侵陵する炎帝を討伐して、天下を平定したので諸侯は軒轅氏を天子とし黄帝と号した。その後、黄帝は山野を治めて道路を通じ区画を設けて百郡に分け、推歩曆算を学び、診察法を学び、また黄帝みずから七情・十義の倫理を定め、泰山に登り封禅を行った。巻中では、長生久視を獲んことを願って神仙を求めて蓬萊をも訪ね、ついで天を圓丘に祭り、さらに王屋山に登り石函を開き九鼎神丹経を得て、神丹を九転する口訣を玄女から受けたと述べる。巻下では先ず、黄帝は「天皇真一之経」を見たが「三一真氣の要」が解し得なかったもので、これが釈解を求めて四方を周流し、遂に峨嵋山の仙宮に住む天真皇人に会って、「真一五芽之文」すなわち「真一之道」を盛った文を授かり、かくして黄帝は九鼎の丹を煉り、丹が成りこれを服して昇仙する(天仙)。

篤胤の著述の意図

(一) 泰一小子の名を南宋・羅泌『路史』後紀・炎帝(神農)紀に見出し、これを少毘古那神に比定し、さらに、伏羲を大圀主神であるとし、青真小童君(青童君)は、その注釈によると少毘古那神(少彦名命)に相当するともいう。黄帝に「真一之道」を盛った文を授けた九天真王は実は青童君にほかならないという。大圀主神は「扶桑君と称する東王父」であり、「此は疑なく大圀主ノ神の御事を訛り伝へ奉れる古仙の遺説」とし、「木公東王父と云は此ノ神を申し天真皇人も此ノ神の所使ならむ」という。(二)「真一の道」を内容とする「真一五芽之文」の経文を峨嵋山に住む天真皇人から授かるのであるが、この天真皇人とは実は青童君にほかならない。篤胤は「形を守り悪を

却くは、則ち独り真一あるのみ」(葛洪『抱朴子』地真篇)を引用し解説する。この「真一の道」こそ、黄帝(あるいは篤胤)の求めた道であろうか。(三)唐土の神仙界の神々は、「神仙界の總司」である大圀主神がその御子を派遣したものであり、神名の相違は古説の訛伝にすぎない。

所謂神基督習合神道をめぐる一考察

三ツ松 誠

石田一良によれば、平田篤胤は宣長の古学神道をキリスト教と習合させ、一神教的・来世教的で倫理的な色彩を持つ神道へと変貌させた。これが神基督習合神道と呼ばれるものであり、その議論は一部門人には引き継がれるものの、国家神道には引き継がれなかったという。神道を「思想の着せ替え人形」と呼んで、それぞれの時代の最新思想を身に着けてきたものと見做し、その一類型として「神基督習合神道」なる概念を提起した石田説がそのまま広汎に受け入れられるものかどうかはさておき、村岡典嗣における発見以来、キリスト教思想が国学思想に与えた影響の如何は、日本思想史上興味深い論点で有り続けていることは間違いない。本報告は、この問題に関するこれまでの議論の方向性を概観するとともに、今後の可能性について聊かの私見を述べるものである。

議論の出発点にあるのは、篤胤説の特徴を来世的信仰と創造神の觀念に認め、それを「本教外篇」における漢籍の天主教教理書受容を根拠に、キリスト教の影響によるものと見た村岡典嗣による議論である。こうした篤胤やその流れを汲む神道家に